

あいづちの男女差に関する一考察 —トーク番組における司会者のあいづちを通して—

辻本 桜子

1. はじめに

筆者は男性の友人と電話で話している時、こちらの話をちゃんと聞いているのか確認をしたことが度々ある。女性の友人に同様の確認をしたことは無いのだが、男性は会話中、反応が乏しいと感じられることが度々あり、話をちゃんと聞いているのか不安に駆られることがある。その理由は男性のあいづちの頻度にあるのではないかと考えた。

私たちの会話スタイルには、情報中心の「リポート・トーク」(report talk)と、情緒中心の「ラポート・トーク」(rapport talk)があり(東 2007:21-22)、Deborah Tannen は、概して「リポート・トーク」は男性の会話スタイルであり、「ラポート・トーク」は女性の会話スタイルであると指摘している(東 2007:24)。

日本語のあいづちは他の言語に比べ、質、量ともに多く、日本の文化や価値観を反映した特徴的なものであると指摘されている(水谷 1988、宮崎 2003 他)。水谷は日本語は 40 以上のあいづち表現を持ち、一分間に平均 15~20 回のあいづちを打つ、との調査結果を示しているが(1988:6-7)、そのような日本語に特徴的なあいづち使用にも、会話スタイルと同様、男女差があるのだろうか。また、男女のあいづちにはどの程度の差が見られるのか。本研究では、あいづちの男女差について考察を行う。

2. 先行研究

あいづちについての先行研究は、上述の水谷(1988)やメイナード(1993)等がある。メイナードは日本語と米語のあいづちの形態を、(1)「うん」「ふ

うん」等の短い表現（２）頭の動き（はっきりした頭の縦ふりと横ふりのみ）（３）笑い、笑いに似た表現、の３分類とし（1993:153）、あいづちの形態と頻度について、日米各 20 組、計 120 分の日常会話をもとに調査を行っている。その結果が表 1 であるが、日本語のあいづちの総数は 871 と、米語（428）の約 2 倍であり、両者には大きな開きが見られる。

表 1（日米会話におけるあいづちの形態と頻度）

あいづちの形態	日本語		米語	
	頻度	総数に対する割合（％）	頻度	総数に対する割合（％）
短い表現	614	70.49	215	50.23
頭の動きのみ	164	18.83	150	35.05
笑い	93	10.68	63	14.72
合計	871		428	

（メイナード 1993:157）

使用されたあいづち形態の内訳を見ると、米語は頭の動きのみの非言語的あいづちの使用率が日本語よりも高い。一方、短い表現を使用しての言語的あいづちは、日本語では 614（70.49％）と、米語 215（50.23％）の約 2.8 倍になっており、米語と比較した時、短い表現を使用したあいづちが日本語のあいづちの特徴であると言える。そこで本研究では、あいづちの形態のうち非言語的あいづちではなく、短い表現を使用した言語的あいづちを主に分析の対象とする。

3. 調査方法

調査の方法としては、テレビ番組「江角マキコの恋愛の科学¹」より、番組中に行われた会話が文字化され、公開されている URL²を用い談話分析を行

¹ フジテレビ系列で 1998 年 10 月 15 日から 1999 年 3 月 25 日までの毎週木曜日、23 時から 20 分間放送されたバラエティ番組。

² 「江角マキコの恋愛の科学」（<http://www.g-one-net.co.jp/los/>）（2007 年 12 月 10 日最終確認）

った。

調査の対象は、1998年10月15日の第1回放送から12月24日の第11回放送までの3ヵ月間、11回分の放送とした。この番組は江角マキコと宮川賢の男女2名の司会者が、毎回異なる男性ゲストを迎え、恋愛についてのトークを進めるという構成になっている。司会者という立場はゲストから話を聞き出して進行するため、頻繁にあいづちを打つと予測されるが、同じ司会者という立場にある男女2名のあいづち使用に、差は見られるだろうか。本研究では、男性司会者、女性司会者のゲストに向けて打たれるあいづち、司会者同士の発話内で打たれるあいづちを調査し、男女2名の司会者のあいづちについて分析を進めていく。

4. 調査結果

4-1 頻度別調査結果

調査結果の分析にあたり、あいづち表現の分類は、先述のメイナード(1993)の3分類、(1)「うん」「ふうん」等の短い表現(2)頭の動き(はっきりした頭の縦ふりと横ふりのみ)(3)笑い、笑いに似た表現、を参考にする。しかし、本研究では先述のように短い表現を使用した言語的あいづちを日本語のあいづちの特徴と捉え、また文字化された資料を用いて調査を進めるため、(2)の頭の動きによるあいづち、(3)の笑いによる非言語的あいづちは調査の対象外とする。更に「短い表現」に関しては、坂本(2004)を参考に分類を行う。坂本はあいづちの表現形式を、(1)固定されたあいづち表現と、(2)その他のあいづち表現に分類しているが、ここでは(1)の「固定されたあいづち表現」を参考にする。表2が坂本の「固定されたあいづち表現」をまとめたものである。

表 2 「固定されたあいづち表現」(坂本 2004: 48-49))

1. あいづち詞	
応答詞	「はい」「うん」「ええ」「はー」などで、質問に対する返事は除く。
ソウ系	「そう」から派生したもの。「そうですか」「そっか」「そうやな」「そうですね」など。
感嘆詞	「わー」「えー」「おー」「ほー」など。
終助詞など	「ねー」「ですねー」「でしょう」など、終助詞や文末表現をあいづちとして使う。
2. あいづち的な表現	
副詞	「本当(に)」「なるほど」など。
形容詞	「すごい」「いい」「えらい」「大変」など。
動詞	「わかる」「ありえない」「いえてる」など。

表 2 の分類をもとに、男女の司会者の会話中に出現したあいづちの分類を行った。結果は表 3 の通りである³。女性のあいづち総数は 108 で、男性 (65) の約 1.7 倍であり、女性の方が圧倒的に多くの頻度であいづちを使用していた。

³ 「うんうん、なるほど」(女性)(12月24日放送分)のように、複数のあいづち表現が併用されているものは「うんうん」を応答詞として、「なるほど」を副詞として別にカウントした。また、「うんうん、うんうん」(女性)(12月10日放送分)のように同一のあいづち表現が繰り返し使用されているものは、読点で区切り、「うんうん」を2回使用としてカウントした。あいづち表現の捉え方として、「うんうん、なるほど」と「うんうん、うんうん」を一塊と捉え、「うんうん」の派生表現として扱うことも考えられるが、本研究では「うんうん」と「なるほど」と、「うんうん」と「うんうん」に分けて扱うこととした。

表 3 (頻度別調査結果)

	女性		男性		あいづち実例
あいづち表現	(回)	割合 (%)	(回)	割合 (%)	
応答詞	54	50.0	12	18.5	うん。 / うんうん。(女性) (10月15日放送分)
ソウ系	17	15.8	10	15.4	そうですね。 / そうだねー。 (女性)(同上)
感嘆詞	20	18.5	34	52.3	エ〜ッ! / へ〜 (女性) (10月29日放送分)
終助詞など	0	0.0	0	0.0	
副詞	13	12.0	7	10.8	なるほど。(男性) (11月5日放送分)
形容詞	3	2.8	1	1.5	すばらしいー。(女性) (10月22日放送分)
動詞	1	0.9	1	1.5	分かりますね。(男性) (11月5日放送分)
合計	108	100	65	100	

また、あいづち表現の総数に対する割合に目を向けると、男性はあいづち表現として、感嘆詞を 52.3%使用しており、女性(18.5%)との差が見られた。男性の用例を次に挙げる。

- | | |
|-------------------|----------------|
| ・ お! (10月29日放送分) | ・ お〜っとお!? (同左) |
| ・ はあ〜。(12月3日放送分) | ・ ほ〜う (同左) |
| ・ ほう、ほう、ほう (同上) | |
| ・ おお! (12月24日放送分) | ・ おおおっ!! (同左) |

男性は、女性よりも使用している感嘆詞の形式も豊富であった。また、上記のあいづちのうち、「ほ〜う」「ほう、ほう、ほう」などは男性特有のあいづちかもしれない。

次に、女性 50.0%と最も頻度が高く、男性は 18.5%と、感嘆詞を用いたあいづちに次いで頻度の高かった応答詞ではどのような表現が使用されていたか、その内訳を表 4 にまとめた。

表 4 (応答詞によるあいづち表現の内訳)

応答詞	女性		男性	
	(回)	割合 (%)	(回)	割合 (%)
うん	13 ⁴	24.0	1	8.3
うんうん	15	27.7	0	0.0
う～ん	15	27.7	2	16.7
いや	4	7.4	5	41.8
いやー	0	0.0	1	8.3
いやいや	1	1.9	0	0.0
いやいやいや	1	1.9	1	8.3
はい	1	1.9	0	0.0
はいはい	1	1.9	0	0.0
はいはいはい	0	0.0	1	8.3
ええ ⁵	2	3.7	1	8.3
ふんふん	1	1.9	0	0.0
合計	54	100	12	100

表 4 から、女性の方が応答詞によるあいづちの使用頻度が高い上、表現のバリエーションも豊富であることが分かる。特に「うん」系のあいづちの使

⁴ 次のような「うん」の疑問形のものも 1 例含まれている。

ゲスト：いや、痛風にならないためにはあんまりプリン体をとんなよと。

女性司会者：うん？

ゲスト：だからプリン体！

(11 月 12 日放送分)

⁵ 「ええ」のうち、次のようなものは感嘆詞を用いたあいづちに分類し、ここには含めていない。

ゲスト：ケンカで一番すごい時にね、恵比寿辺りから多摩川まで歩いてー

女性司会者：ええ！？恵比寿から多摩川ってかなりありますよー！（10 月 22 日放送分）

用頻度が高い（合計 43 回、79.4%）。「うん」と一度言うだけではなく、「うんうん」と重ねたり、「う～ん」と伸ばしたり、「うんうん、なるほど。」と他のあいづち表現と併用するなど、積極的なあいづち使用の傾向が見られた。一方、男性の応答詞によるあいづち形式では、「いや」系の表現形式の頻度が高かった（合計 7 回、58.4%）。これについては、次の機能別調査結果も踏まえて、後述を行う。

4-2 機能別調査結果

次に、更に応答詞を用いたあいづちの機能別分類を行う。堀口（1997:52-60）はあいづちの機能を次の 5 つに分類している。（1）聞いているという信号（2）理解しているという信号（3）同意の信号（4）否定の信号（5）感情の表出。ここでは堀口（1997）に基づいた分類を行うが、（1）と（2）は堀口も「理解というのは聞くことが前提にあるから、聞いているという信号とはっきり分けられないことが多い」（1997:55）と述べるように、時に区別が困難なため、ここでは「聞いて理解していることを示す信号」と一括りにし、分類を行う⁶。また、いずれの分類にも当てはまらないものを「その他」とすることとした。下表 5 が応答詞を用いたあいづちを、機能別に分類したものである。

表 5（応答詞を用いたあいづちの機能別分類）

	女性		男性	
	(回)	割合 (%)	(回)	割合 (%)
聞いて理解していることを示す	25	46.3	0	0.0
同意	19	35.2	4	33.3

⁶ 堀口が分類困難なものとして挙げる例を下に示す。

1 A: 私はね

2 B: ええ

3 A: ちっちゃい時は

4 B: ええ

5 A: おさげだったんですけど

6 B: ええ （徹子の部屋 2）（堀口 1997:55）

否定	8	14.8	6	50.0
感情の表出	0	0.0	2	16.7
その他	2	3.7	0	0.0
合計	54	100	12	100

	あいづち実例
聞いて理解していることを示す	男性司会者：ということは、袴田さん（注：ゲスト）は一目惚れはしないタイプですか？ ゲスト：そうですね、しないですね。すごい人見知りなんで… 女性司会者：<u>うんうん</u> ゲスト：恋愛もやっぱり何回も会っていかないと… （12月3日放送分）
同意	男性司会者：（略）相手が自分にドキドキしているのを知ったら、どうなんでしょう？うれしいですか？それとも引きます？ ゲスト：うれしいだろうね。 女性司会者：<u>ウン</u>。可愛くて可愛くてしかたがないんじゃないかと思いますよ。 （10月15日放送分）
否定	ゲスト：一目惚れした事ありますよ。 女性司会者：いつごろですか？
感情の表出	ゲスト：それは、言えないよね。 男性司会者：<u>いや！</u>…博士！（注：女性司会者）どうします？ （感情の表出） 女性司会者：私も言えません。 男性司会者：<u>いやいやいや</u>…聞き出して下さいって言ったんですよ僕は！ （否定） （10月15日放送分）
その他	ゲスト：出逢った時が、その時だ。 女性司会者：……<u>ハイ</u>！今日はどうもありがとうございました。 （10月15日放送分）

表5から分かるように、「聞いて理解していることを示す」あいづちが、女性は25回使用されていたのに対して、男性の使用は確認できなかった。また女性は「同意」のあいづちも19回と多く、男性（4回）との差が顕著であった。相手の発言に感じ入っている時や納得した時、共感した時にそれをはっきりと相手に示すため、女性は明示的にあいづちを使用する傾向にあるようだ。

また、相手に同意するあいづちだけではなく、「否定の信号」（堀口 1997）（「非同意を示すあいづち」（坂本 2004））の使用も見られ、女性は8回、男性は6回行われていた。この用法では、上の「否定」のあいづち実例で示したような前文の否定のほか、次のように、否定的な意見や不満があいづちに後続している例も見られた。

ゲスト：クリスマスっていうのは、キリスト教の人たちが神様に感謝するんですよ！

男性司会者：う～ん、でも、日本の場合は…

女性司会者：おかしいと思う…（略）（12月24日放送分）

「否定」のあいづちは女性にも使用されていたが、あいづち総数の割合から見ると、男性の使用率が50.0%と高くなっていた。ここで更に「否定」に使用されていた応答詞あいづちの形式に目を向けると、表6のように僅差ではあるが、女性が「うん」系のあいづちを「否定」にも使用しているのに対して、男性は「うん」系を使用するより「いや」系応答詞を使用し、より明確な形で「否定」を表す傾向にあるようだ。

表6（「否定」に使用されていた応答詞によるあいづち表現）

応答詞	女性	男性
	(回)	(回)
うーん	4	1
いや	3	3
いやー	0	1
いやいやいや	1	1
合計	8	6

男性は更に「いや」を、先にあいづち実例で挙げたような「感情の表出」にも2例使用していた。男性の感嘆詞を用いてのあいづちが52.3%と、女性(18.5%)より多いことは前節の表3でも確認したが、男性は応答詞を用いたあいづちでも「感情の表出」を表したものが16.7%と、女性より多く観察された。堀口は「感情の表出」の機能を、「話し手の言うことを聞いて感じた驚き、喜び、悲しみ、怒り、疑い、同情、いたわり、けんそんなどいろいろな感情をことばで表すこと」と述べるが(1997:59)、「話を聞いて理解していること」、「同意」を示すためにあいづちを打つ女性に対し、男性は「否定」や「感情の表出」のためにと、自らのメッセージを伝達する目的でのあいづち使用が多いことが明らかになった。女性、男性の談話におけるその典型例を下に挙げる。女性司会者の最初の「うん」は「同意」のあいづち。次に、ゲストの発話を受けた後、女性司会者は「聞いて理解していることを示す」ためにあいづちを打っているが、男性司会者は感嘆詞を用いた驚きや感心を示すあいづちを打っており、両者のあいづち使用の差がうかがえる。

男性司会者：(略) 女性は男性にマメにされると、心開きがちというデータがあります。

女性司会者：うん、ありますね。

男性司会者：袴田さん(注：ゲスト)は女性に対してマメなほうですか？

ゲスト：0時とかに仕事が終わって朝6時からでも、その1時間、2時間、会うために僕は行きましたけどね。

女性司会者：うん、うん。

男性司会者：ええ～！(笑)

(12月3日放送分)

5. 考察

前章で見たように調査結果から、女性の方があいづちの頻度も高く、表現のバリエーションも豊富であることが分かった。頻度差は女性が男性の約1.7倍であった。また応答詞によるあいづちの機能別の結果では、「聞いて理解していることを示す」ためのあいづち使用で、男女の差が浮き彫りになった。

女性はいづち総数のうち約 46.3%が「聞いて理解していることを示す」ために使用されていたが、男性の使用率は0%であった。水谷（1988:10）は日本人の話し方を「共話」と呼ぶが、いづちの使用実態を調査した本研究の結果から、女性はいづち「共話」的ないづちを打つという傾向が明らかになった。

このように女性の方がいづちの頻度が高く、表現形式も豊かである理由として、やはり先述の Deborah Tannen が指摘するような、男女の会話スタイルの違いがいづちにも反映されていると言えるだろう。女性の話し方は相手を受け入れようとし、共感、親密さを示す「ラポート・トーク」（東 2007:21-25）であり、いづちにもその傾向が現れると考えられる。会話中、相手の話を聞いていることを常に示し、同意、共感はいづちで示しながら会話を進めるのが、女性の会話スタイルのようだ。一方、男性の話し方は、新しい情報を開示したり、時には自分の知識、能力をひけらかしたりする「リポート・トーク」（東 2007:24）であり、本調査の結果、男性のいづち使用の特徴が「否定」や「感情の表出」に見られることから、いづちもまた、情報伝達の目的で打たれる傾向にあることが分かった。

今回の調査では言語的いづちしか調査対象にしていなかったため、言語以外の手段でどの程度いづちが打たれているのか不明であるが、少なくとも言語的いづちの頻度は女性の方が男性よりも高いことが明らかになった。男性と話している時にいづちが少ないことに違和感を覚えたり、不満を覚えたりする女性は当然多いことが予想され、話をちゃんと聞いているのか、確認したくなることがあるのも不思議はないだろう。

近年、日本語教育の場では、日本語らしい「聞き手の行動」として、いづち習得の必要性が述べられ、指導法の研究もされつつある（坂本 2004、宮崎 2003 他）。宮崎（2003）は上級日本語学習者にロールプレイを行わせ、日本人ボランティアに全体の印象など評価をさせている。その評価に加え、宮崎が観察をまとめたものの一部を下に記す。

- ・ いづちがある程度多ければ全体の印象がいい。

- ・ あいづちが少な目の学習者でもうなずきが多ければ、全体の印象は上がる。
- ・ あいづちが少なめでうなずきも少ない場合は全体の印象はあまりよくない。

(宮崎 2003:52)

日本語を話す時、全体の印象の良し悪しを決める要因として、いかにあいづちやうなずきなどの「聞き手の行動」の要素も大切であるか、宮崎の調査結果から分かる。

日本人男性も女性と会話をする時に、「聞いて理解していることを示す」ためにもあいづちを打つなど、今より少々あいづちの頻度を増やせば、女性にとって全体の印象がより良くなるかもしれない。

6. まとめと今後の課題

本研究では、あいづちの男女差に注目し、頻度や表現形式の調査を行った。その結果、女性の方があいづち、特に応答詞を使用したあいづちの頻度が高く、また表現形式も豊かであることが明らかになった。「うんうん、うんうん」や「うんうん、なるほど」といった「二重あいづち」や「多重あいづち」(筆者による造語)の使用率も高かった。女性の場合は、会話中常に相手の話を聞いていることをあいづちを用いて示し続け、同意や共感を示すために使用する傾向にあることが分かった。一方、男性は、相手の発話を受け、否定や内容に関する感情の表出など、自らのメッセージ伝達性の強いあいづちを打つ傾向にあることが分かった。

本研究ではシミュレーション的に、男女一名ずつを対象に分析を進めたが、ゲストを迎えて会話を進行していく司会者のあいづちを分析することで、男女のあいづち使用の差を理解する一助になったのではないかと考える。

今後は調査対象を更に増やし、他のトーク番組、インタビュー、討論番組などからのデータを分析、比較し、量的な調査を継続して進めていきたい。

<参考文献>

- 東照二 (2007) 『言語学者が政治家を丸裸にする』 文藝春秋
- 坂本浩子 (2004) 「日本語のあいづちと聞き手の役割ー上級日本語学習者のあいづち使用調査を通してー」『葛野』 8, 45-70
- 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』 7(12), 4-11
- 宮崎幸江 (2003) 「「聞き手の行動」をどう教えるかーサマーコース中級クラスでの指導例ー」『ICU 日本語教育センター紀要』 12, 45-62
- Tannen, D. (2001) *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: HarperCollins.

(立命館大学大学院修士課程)